

琉球大学学術リポジトリ

実生活に活かす力をはぐくむ授業の創造 ～英語科における実践(私案)～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2012-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 賢, OSHIRO, Ken メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25520

実生活に活かす力をはぐくむ授業の創造

～英語科における実践（私案）～

大城 賢*

Developing Students' Practical Knowledge and Skills

- Focusing on English Lessons -

Ken OSHIRO

はじめに

琉球大学教育学部附属中学校では平成22年度より「実生活に活かす力をはぐくむ授業の創造」のテーマのもと研究を行っている。研究総論¹においては研究内容として、①実生活に活かす力の捉え方、②実生活に活かす力をはぐくむ授業、③はぐくみたい力の検証の3つの柱を示し、その3つについて各教科での研究・実践を求めている。本論文は、平成24年度から全面実施される新しい学習指導要領にも言及しながら、研究総論で示された3つの柱について英語科としてはどのように考えたらよいのか、さらに実践例を紹介するとともに、「実生活に活かす力をはぐくむ授業」という観点から実践例を検討するものである。

I 英語科における「実生活に活かす力」とは

研究総論においては、(1)「実生活に活かす力」と、(2)「基礎・基本」の2つを定義している。「実生活に活かす力」は次のように定義してい

る。

生徒が各々の生活場面や社会生活において遭遇するであろう諸課題に対して、各教科・領域で学んだ知識や技能、思考力等を活かして積極的に対応・解決していく力

この定義を英語科に当てはめて考えてみると、「英語が必要な実生活の場面で、これまで学んだことを活かして課題解決ができる力」と定義することができる。換言すると、このことは、英語科で言えば学習指導要領で示されているコミュニケーション能力と捉えてもよい。学習指導要領における英語科の目標は以下のとおりである。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う

* 琉球大学教育学部

¹ ここでいう研究総論とは附属中学校第24回教育研究発表会（平成23年11月12日）で示された内容をさす。当日配布の「指導案集」の前半に掲載されている。ただし、これは暫定的なものである。筆者も研究推進部のメンバーとして総論の作成に関わった。

学習指導要領（外国語）現行版では「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」（下線筆者）となっているが、改訂版では「実践的」という言葉が削除されている。これは、コミュニケーションはもともと実践的なものであるの、あえて「実践的」という言葉を使わずに、平易にコミュニケーション能力の重要性を訴えたものと解釈できる（新里；2008など）。

このように考えると、英語科において「実生活に活かす力」とは、英語学習そのものの目標であり、英語科においては長年にわたり、実生活に活かす力（＝コミュニケーション能力）の養成を模索してきたと言っても過言ではないことが分かる。

研究総論では「基礎・基本」については、文部科学省の提唱する「生きる力」をベースにOECDのキーコンピテンシー、人間戦略研究会の「人間力」、社会人基礎力研究会の「社会人基礎力」の視点を加えて以下のように定義している。²

表 1

確かな学力	<u>知識、技能、思考力、判断力、表現力、コミュニケーション力、情報活用力、創造力、計画力</u>
豊かな人間性	<u>自律心、思いやる心、協調性、感動する心、リーダーシップ、公共心、規範意識、忍耐力</u>
健康・体力	<u>健康、体力、ストレスコントロール力、自己管理能力</u>

（*下線は文科省の「生きる力」）

無藤は「基礎・基本」とは学習指導要領の総体であると述べ、研究総論で考える「基礎・基本」は無藤の考えに類似していると述べている³。しかし、研究総論においては無藤の考えと、どこが、どのように類似しているのかが述

² 「第24回教育研究発表会学習指導案集」（2011），p.6

³ 無藤 in 浅沼（2008），p.32

べられていない。⁴

「確かな学力」について、文部科学省は、「学力」の3つの要素を挙げており、それは①基礎的な知識及び技能、②思考力、判断力、表現力、③主体的に取り組む態度である。表1では③の「主体的に取り組む態度」が抜けている。また、「コミュニケーション力」と「表現力」はどこがどう異なるのか。情報活用能力は、「活用」という点から考えると「基礎・基本」に含めるべきなのか。「創造力」は「思考力」に含めることが可能か。「計画力」は「活用」と併せて検討されるべきではないかなど、検討の余地がある。

「豊かな人間性」の内容についても、リーダーシップ、公共心、規範意識、忍耐力などは文科省の「生きる力」に含まれないのかどうか。また、「健康・体力」のストレスコントロール力、自己管理能力はどうかなど疑問も残る。仮に「基礎・基本」が学習指導要領の総体以上のものであるなら、教育課程の中で、それをどのように位置づけ実践するかについても検討しなければならない。

以上のことが明確にならない限り、英語科ではどのように「基礎・基本」を捉えるべきかを明確にすることは现阶段では大変難しい。筆者としては無藤の述べているように、「基礎・基本」は学習指導要領の総体と捉え、「基礎・基本」を実生活に活用することを考えることが、即ち、「実生活に活かす授業の創造」に繋がっていくと考える。したがって、暫定的ではあるが、英語科においても「基礎・基本」は学習指導要領の総体（英語科の場合は「中学校学習指導要領（英語）」）と考えて以下の議論を展開する。

II 実生活に活かす力をはぐくむ授業

研究総論においては「実生活に活かす力」をはぐくむ授業の内容として(1)「習得・活用・探究型の学習との関係」、(2)「授業づくりの構想」が述べられている。英語科においては研究総論

⁴ 「第24回教育研究発表会学習指導案集」（2011），p.6

を踏まえて「実生活に活かす力をはぐくむ授業」をどのように捉えればよいのか、筆者の考えを述べる。

1 習得・活用・探求型の学習との関係

研究総論は、実生活に活かすという場合の「活用型」と文科省の定義する「活用型」の違いについて言及している。少し長くなるが以下に引用する。

前述した文科省の見解からすると、「習得」、「活用」、「探求」の3つの学習のタイプには、一般的には習得から活用へ、活用から探求へとという「順序性」があると考えられる。しかし、本研究では習得から活用へとという順序性もあるが、むしろ「習得された基礎・基本がどのような場面で、どのように活用され、目的とする力（実生活に活かす力）をはぐくむのか」という、両者の『関係性』を重視している。また、基礎・基本を活用する場面を設定することで、知識や技能の活用の仕方を思考させ、判断させる活動を通して、知識や技能、思考力等の質のレベルアップを図れるのではないかと考える。それゆえに、本研究における活用型学習は、如何にして思考させるかが重要であり、思考する過程を通して高次な知識、技能、思考力等の育成を図る学習だと言える。そのため、基礎・基本を活用する過程で思考させ、新しい発見や次なる疑問が湧くような授業づくりが重要であると考え。〈中略〉本校では、実生活に活かす力をはぐくむ授業は「基礎・基本を実生活に活かす場面を設定した活用型の学習を行うことによって、実際に使える知識・技能、思考力などをはぐくむ。そして、次の段階ではこのような力が新たな基礎・基本となって使われる」というイメージで捉えている。このように、活用型の学習が螺旋状に高まることによって、高次な知識や技能、思考力などが獲得され、実生活に活かす力になるのではないかと考える。⁵

研究総論は、「習得」、「活用」、「探求」の順序性もあるが、むしろ「習得」と「活用」の両者の「関係性」が重要であると述べている。順序性と関係性の説明が不足しているが、ここで最も大切なことは、文科省の示す活用型が、どちらかという学習場面での活用であるのに対し、研究総論の示す活用型は実生活の場면을強調した点である。活用型学習の根拠となる文言は、学習指導要領の「第1章 総則」「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」2にある。そこには「各教科の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力などをはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視する」と述べられている。つまり、「思考力、判断力、表現力」を育てるために、「活用型学習」があるというのである。そこでは、活用の場面は明示していない。

これに対し、研究総論で述べている活用型は、生徒の活動する全ての場面を含むものとし、実社会や将来の生活までを包含するものと捉えている⁶。したがって、「基礎基本」を活用する場面も、どちらかという実生活を強く意識したものとなっており、教室においても、実生活の場면을積極的に取り入れて、「思考力、判断力、表現力」を育てていこうというのである。そして、この活用型の授業は、「思考力、判断力、表現力」を育てる手段でもあるが、結果として実生活に活かす力に繋がるものになることを目指している。この点が研究総論のユニークな点である。

そこで、この考え方を英語科に当てはめて考えてみる。英語科においては学習する単元の語彙や文法が基礎的・基本的な知識・技能と考えられる。しかし、当該の単元において語彙や文法を理解しているからと言って、それが実際に使えるようになる保証はない。それらの語彙や文法を、他の文脈（場面）で使えるようになって初めて、学習した語彙や文法は活用されたことになり、実際に使えるようになるのである。松本は「実は、活用型学習（活用力）は、新し

⁵ 「第24回教育研究発表会学習指導案集」（2011）、p.7

⁶ 同上、p.6

い教育的関心のように思われがちだが、英語教育に携わっている教員にとっては従前よりあたり前のことである。それは、言語本来の機能を考えれば、語彙や文法事項を理解しただけにとどまってもあまり意味がないからである」と述べている。したがって、英語科における『活用型学習』は、従前から行われている『コミュニケーション活動』を充実させるものと考えてよい。異なる点は、従前の考え方が「活用」がコミュニケーションの目的であるのに対し、研究総論が求めている「活用」は「思考・判断・表現」の手段でもあることである。その点については後述する。

松本が述べている「活用型学習」に、さらに付け加えると、これはRivers and Temperley (1978)が30年以上も前に提案した学習過程モデルと軌を一にするものである。RiversらはLearning (基礎・基本を習得させる学習活動)、Pseudo-communication/Practice (疑似コミュニケーション/練習)、Real communication (現実場面のコミュニケーション)の三段階の活動を考えている。そして、いわゆる学習・練習の段階であるskill-gettingとコミュニケーションの場であるskill-usingとは"hand in hand (=支え合っ⁷)"に進めなければならないと説いている⁸。今回の学習指導要領においては活用することによって知識・技能の定着を図ることも意図されている。また、研究総論では「活用型の学習が螺旋状に高まることによって、高次な知識や技能、思考力などが獲得され、実生活に活かす力になる」¹⁰と述べている。この2つの指摘はReverseのhand in handな活動と軌を一にする考え方である。さらに、松本が指摘するように、活用型の英語教育は、「習得から活用へ」という一方的な流れではなく、「学習したら活用する」「活用しながら習得する」というような双方向的な流れであり¹¹、研究総論でも指摘しているように、学習した知識を実際に使

うことによって逆に学習して得た知識を定着させることにもつながるものである。

ところで、「探究型」については、総論はそれほど言及していない。総論は、「習得」、「活用」、「探究」には「順序性」があること、また、活用型の授業には一部探究型の学習も含まれていることを述べているのみである。¹² 新学習指導要領によると、「探究」は、子どもが各教科などで習得した知識・技能を教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題の解決に役立てる取り組みであり、主として「総合的な学習の時間」における取り組みとして想定されている。

このことを英語科の学習に当てはめて考えてみると、例えば、英語の授業の中で「外国の友達に英語で手紙を書く」ということに取り組んだとしよう。実際に手紙を書いて送ったら相手から返事が来た。その返事を読むと、自分の意図していたことが上手く伝わっていないことが分かった。その場合、うまく伝わらなかったのはなぜだろうと考えることが探究型の出発点になる。そしてよく考えてみると、どうも地理的な違い、歴史的な違い、政治的な違い、あるいは文化的な違いといったものが絡んでいるのではないかということに気付く。そこで、教科横断的に、手紙を送った相手の国のことを実際に調べてみることになる。英語科においては、探究型の学習をこのように考えるとよいのではないだろうか。もちろん研究総論が示しているように、この探究型の学習は必ずしも総合的な学習の時間のみで行う必要はなく、一部、教科の中に取り入れて実践することも可能である。

2 授業づくりの構想

研究総論は「実生活に生かす力をはぐくむには、生徒が自分の日常と関連づけられる課題や将来の生活に役立つと実感させられるような現実的な課題が有効だと考えられる。〈中略〉また、実生活に生かす力をはぐくむためには、意図的な問題解決の場面設定が必要であり、その力は問題解決の過程を通してはぐくまれてい¹²」

⁷ 松本 in 安彦 (2008), p.81

⁸ Hand in handを筆者が訳した。

⁹ Rivers and Temperley (1978), p.4

¹⁰ 「第24回教育研究発表会学習指導案集」(2011), p.7

¹¹ 松本茂 in 安彦 (2008), p.81

¹² 「第24回教育研究発表会学習指導案集」(2011), p.7

く」¹³と述べている。前述したように、英語科においては、学んだことを実際の場面で使っていくことは、コミュニケーション能力を養成するためには重要なことである。また、問題解決の場면을意図的に設定して言語活動を行う方法はTask-Based Instructionとして英語教育においては確立した指導法になっている。したがって、英語科においては従来の研究実践の積み上げを踏まえながら、さらに現実的な場面や、教室の中に現実的な場面を持ち込むことによって実生活に生かす力をはぐくんでいくことが求められる。

研究総論は課題解決を通して思考力・判断力・表現力を養成することも求めている。この点は、従来の英語科にはあまり意識されなかったことである。今後は英語科においても、思考力・判断力・表現力の養成につながる課題の設定が求められている。

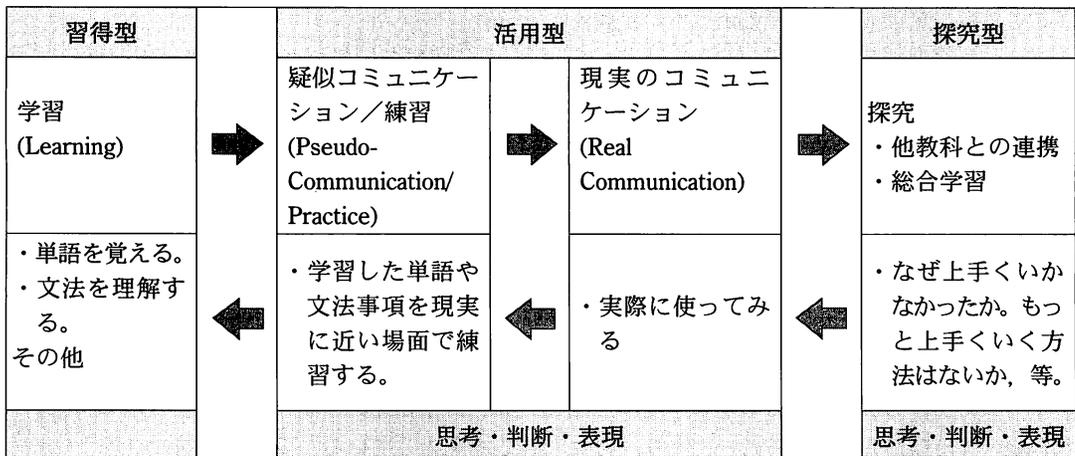
研究総論においては授業づくりの1つとして「生徒に深く思考させるには、まず課題（教材）に対して『自分はどう思う』といった問題解決に至る自分なりの考えを整理させ、その上で他者との交流を図り、思考の質を高める学習の工

夫が必要になる」¹⁴と述べている。教科書を左から右に訳すのみの授業では、生徒は深く思考することもないし、自分の意見を持つこともない。教科書を使用して授業を展開する際には、内容を確認するためのDisplay question（先生が答えを分かたうえで生徒にする質問）だけで終わるのではなく、Referential question（内容と関連した質問で、生徒の考えを問う質問）を増やして、生徒が教材に対してどう思っているのかなどを尋ねたり、内容に関してグループで議論するなどを通して思考の質を高めていくことも必要となる。具体的な実践例については後述する。

Ⅲ 英語科における「実生活に活かす力をはぐくむ授業」の構想

前述したように、実生活に活かす力をはぐくむ授業は、Riverse and Temperley(1978)の考えと軌を一にしている。その考えを基にして、習得型、活用型、探究型学習、さらに思考・判断・表現の場면을重ねると以下のような授業構想図になる。

<図1>



知識や練習を積みめば、いつか使えるようになるということはありません。使えるようになる

には、やはり同時に使ってみることが必要である。一方、前述したように、図の矢印が双方向になっているのは「学習し、練習し、その後使ってみる」という学習過程だけでなく、実際に使っ

¹³ 「第24回教育研究発表会学習指導案集」(2011), p.8

¹⁴ 同上, p.8

てみて、そこで必要になったものを後で練習したり、学んだりする過程を表している。「完璧に学習し、完璧に練習してから英語を使ってみよう」と思っていると、いつまでたってもその瞬間は訪れない。図1は、Rivers and Temperley の3つの段階 (Learning/Pseudo Communication/ Real communication) を下敷きにしなが、習得型、活用型、探求型の学習過程を位置づけている。探求型の学習を追加したところがRivers and Temperleyの構想とは異なっている。英語科の授業においては、図1で示すような考え方を

を基本的な考え方として授業を構想したい。

また、研究総論では実生活は授業を含むものと考えている。つまり、授業の中も十分にReal Communication の場となりうる。英語の授業においては、できるだけ英語を使い、生徒との間に (または生徒同士の間) に豊かな本物のコミュニケーションが常に行われることが実生活に活かす力 (=コミュニケーション能力) を養成するためには重要である。

具体的な授業実践レベルの内容としては以下のようなものが考えられる。

習得型	活用型		探求型
学習	練習	使ってみる	探究
<ul style="list-style-type: none"> ・フォニックス ・英会話カード など 	<ul style="list-style-type: none"> ・英会話カード¹⁵ ・スキット など 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵/英作文活動¹⁶ ・英語抜き書き英作文¹⁷ ・英語紙芝居作り¹⁸ ・Show & Tell ・スピーチ ・ロールプレイ など 	<ul style="list-style-type: none"> ・英字新聞作り ・英語HP作り など
	思考・判断・表現		思考・判断・表現

IV 実践事例

ここでは、琉球大学教育学部附属中学校教員が実践した事例を2つ取り上げ検討する。

1 ホームステイ体験談を利用した教科書題材の導入の工夫¹⁹

與那嶺は教科書の題材である"Homestay in the United States"の題材に関連させて、実際にホームステイ・プログラムに参加した生徒の話、引率経験のある教師の話、そして海外からのホームステイ・プログラム参加者を受け入れた経験のあるALTの話を書くことにより、実生

活に活かす力をはぐくむ授業への取り組みを紹介している。指導計画は表2のようになっている。

1時間目の授業については指導案が載っている。指導案によると、ホームステイ参加者の立場、引率者の立場 (JTE)、受け入れ側の立場 (ALT) からホームステイの体験が語られている。指導案では、参加者はホストファミリーとの関わりやオーストラリアの生徒達との交流の体験を発表している。また、引率者は学校では学べない貴重な体験や英語が十分に通じないことによるホームシックになった生徒達のこと、また、生徒達の関係者に対するマナーの問題などを報告している。受け入れ側のALTは、ホストファミリーとして感じた生活上のマナーの違いに対する驚き、言葉の壁で困ったことなどについて話している。いずれもパワーポイントを使うなどして、聞き手が興味をもち、また理解しやすいような発表の工夫がなされている。

¹⁵ 詳しい実践内容は 大城 (1998) を参照。

¹⁶ 同上

¹⁷ 同上

¹⁸ 同上

¹⁹ 與那嶺信雄の実践。「実践事例集第6集」琉球大学教育学部附属中学校 (2011年10月) に所収。

<表2> 指導計画

1時間目：題材内容に関する導入（本時 *チームティーチング）
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイの参加者の立場から（3年生の体験者）、引率者の立場から（JTE）、受け入れ側の立場から（ALT）の<u>それぞれの体験談（オーストラリアでのホームステイ）を通して</u>、ホームステイについてのイメージをつかませ、興味を持たせる。 ・聞き取り活動を通して、リスニングの力をつける。・導入の工夫として<u>写真やイラストを使ったり</u>、クイズ形式での予備知識、<u>グループでの話し合い活動等</u>を取り入れることで、話の内容をより深く理解させる。
2時間目：Starting Out
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイの<u>ガイドブック</u>から、参加する側として大切なことは何かを知る。 ・have to/ don't have toを用いた文の形、用法を理解し、簡単な対話ができる。
3時間目：Dialog
<ul style="list-style-type: none"> ・「ベッドメイキング」の話題を通して、ホームステイでの様々な「常識」の違いを知る。 ・will を用いた文の形、意味、用法を理解し、それを用いて簡単な対話ができる。
4時間目：Reading for communication ①
<ul style="list-style-type: none"> ・苦情とそれに対する助言を読んで、誠意を込めて「<u>素直かつ丁寧に</u>」自分の意志を伝えることの大切さを知る。
5時間目：Reading for communication ②
<ul style="list-style-type: none"> ・苦情とそれに対する助言を読んで、「<u>ホストファミリーの一員である</u>」ということはどういうことかについて考える。 ・must/mustn't を使って日本にくる外国人への簡単な助言ができる。
6時間目：まとめ
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイに関する「常識」を通して、<u>人と人とがよりよく付き合っていくために大切なことは何かをまとめて発表する</u>。 ・既習事項を使ってクラスの仲間とコミュニケーション活動ができる。 ・小テスト

<下線は筆者による>

この実践は、まさしく実生活を授業の中に取り込んだ実践である。しかも、この種の実践は、参加者の一方的な話を聞くことで終わる場合が多いが、この実践は参加者、引率者、そして受け入れ側の意見も併せて聞くことによって様々な観点からホームステイを考える工夫がなされている。参加者の楽しい体験が語られると同時に、引率者からはホームシックになり苦しい体

験をした参加者のことも語られる。また、受け入れ側からはマナーの違いに対する驚きなども本音で語られる。

実体験を英語で聞くことは、図1の区分によれば活用（Real communication）にあたる。授業では3人の話を聞いて分かったことや印象に残ったことなどをメモするワークシートが準備されているが、「メモ」という行為も実生活に

は有用な技能である。また、話を聞いた後はグループで話し合う時間が設けられている。活用の場面を設定すると同時に、グループでの話し合い（言語活動²⁰）を通して「思考・判断」の場面も設けられている。

2時間目にはホームステイの「ガイドブック」が使われている。教科書とは別に実際の「ガイドブック」を利用することも実生活を授業に取り込む方法としては適切である。

3時間目以降は、教科書の内容をメインにししながら「ベッドメイキング」の話題、「常識の違い」、「苦情とそれに対する助言」、「ホストファミリーの一員であることの意味」などが学ばれていく。1時間目に3人の体験を通じて感じたことや考えたことが教科書の展開に沿って深められていく授業構成になっている。

最後の6時間目は「人と人とがよりよく付き合い合っていくために大切なことは何かをまとめて発表する」活動がある。英語科の授業は、今でも教科書の内容を理解するだけにとどまる授業が多いと思われるが、それでは研究総論が求める思考力・判断力・表現力をはぐくむことは不可能である。英語を通して自ら思考する場面をしっかりと指導計画に組み込むことが重要である。そのことを通して、実生活に活かす力をはぐくまれていこう。示唆に富む実践である。

2 シアトルでの1日：身近な地域を紹介し、英語でやりとりしよう²¹

筆者は全10時間の単元指導の中で、第3時の授業と最終回にあたる第10時の授業を参観した。手元にある指導案と授業資料²²から本実践の概要を示し、研究テーマである「実生活に活かす力をはぐくむ授業」の観点から検討したい。

²⁰ 英語科においては英語を使う言語活動と日本語を使う言語活動があるが、この場合は日本語を使う言語活動。

²¹ 與那嶺信雄（琉球大学教育学部附属中学校）の実践

²² 附属中学校研究発表会（2011年11月12日）に配布された資料。

（1）授業の概要

単元名は「Program 6 シアトルでの1日（Sunshine English Course 1, 開隆堂）～身近な地域を紹介し、英語でやりとりしよう～」である。実践者である與那嶺は指導案において以下のように自らの考えを述べている。

<教材観・指導観>

○本課の設定や対話を参考に、最終課題として「身近な地域の紹介活動」を行う。相手の話す内容に興味を持って聞きながら、更にお互いに質問やコメント(一言感想)をするなどして一方的な発表ではなく、会話をふくらませていく活動に発展させていきたい。

○ストーリーの流れにあった海外旅行に関する予備知識を与え、またシアトルの情報も加えながら生徒の興味関心を引き出していきたい。

○ここでは観光名所や土産物についての対話が行われていることから、それぞれの場面に応じた会話（質問の仕方やその受け答え方）を意識的に取り上げる。それによって本課の最後に予定している「身近な地域の紹介活動」において、班の中での話し手と聞き手の双方向のやり取りにつなげていきたい。

○各パートの学習においても新出単語表現、内容理解に加えて、「地域紹介活動」での双方向のやり取りに使える既習表現の学習やコミュニケーション活動などを取り入れていく。

○日頃から行う帯活動として、会話をするにあたって聞き取ったことをメモする（書く）活動、またそのメモから次の会話を考える活動など、4技能（聞く・話す・読む・書く）を組み合わせるコミュニケーションを行わせたい。

<本単元を通してはぐくみたい「実生活に活かす力」>

○「身近な地域の紹介活動」を通して、本課のシアトル観光の話と比べながら自分の暮らしている身近な地域の良さに目を向け、それを既習表現や新出表現を使いながら分かりやす

く人に伝えることができる。

- 「身近な地域の紹介活動」を通して、相手の話の内容に興味を持って積極的にメモをとり、質問・コメント（一言感想）をしたりしながら会話をすることができる。

表3は単元指導計画である。実際には4ページにわたる詳細な指導計画を作成しているが、ここでは紙面の都合上内容的に本論文と関連する事項のみを取り上げている。

<表3> 単元の指導計画（全10時間）

時間	内 容
1	パスポート、地図、写真などを用いて英語でやりとりしながら海外旅行やシアトルに関する予備知識を与え、生徒の興味関心を引き出す。
2	【帯活動】ペアで30秒チャット活動をさせる。そしてその内容を記録させる。また、会話を続けるために言いたかったけれど言えなかった表現なども記録させる。
3	【帯活動】前時に言えなかった表現等を確認して、チャット活動を行わせる。その後、話した内容や更に言いたかったのに言えなかった表現などを記録させる。
4	<省略>
5	家族紹介活動を班で行う。各発表を聞きながらメモをとり、発表者以外はそれぞれコメントや英語による質問をする。
6～8	<省略>
9	「地域紹介活動」の進め方を確認する。また、積極的な発表や質問・コメントの仕方、話し手や聞き手の態度などについても再確認する。（活動はグループ単位）
10	まとめ

(2) 授業の検討

1時間目には本課全体の進め方を提示するとともに、実際に教師が使用したパスポートや地図、写真などを用いて海外旅行やシアトルに関する予備知識を与え、生徒の興味関心を引き出している。教科書の内容と関連させて実物を示すことは、これから学ぶ内容が教科書の中だけの話ではなく、自分が実際に海外へ行くことをイメージさせるものである。実生活の場面と関連付けることによって生徒の興味関心も引き出すことができる活動である。

チャット活動は帯活動としてほとんど毎回行っている。この活動は自分の考えや経験を既習事項を活用して自由に英語で話す体験をする活動

である。自分の言いたいことを自由に話す訳であるから、まさしく教室の中におけるReal communication 活動であり、別の言い方をすれば「活用型」の授業場面である。英語科ではsmall talk（ちょっとしたおしゃべり）として馴染みのある活動であるが、本実践で注目すべき点は、「会話を続けるために言いたかったけれど言えなかった表現を記録させる」点である。換言すると、これは「活用から習得へ」という逆の流れの活動である。生徒は実際に活用することによって、既習事項を十分に理解していないことや、新たな表現を学習する必要があることに気付く。與那嶺は「習得から活用」そして「活用から習得」という二つの流れを意図的に創りだしている。活用型学習を短い時間ではあつ

でも毎回の帯活動として<習得→活用→習得→活用・・・>というスパイラル型の活動と組み合わせ実践は効果的であると思われる。

本実践は最終的には「地域紹介」を英語で行えることを狙っているが、授業者が「教材観・指導観」で述べているように、「地域紹介」の活動で使われそうな語彙や表現は教科書を進める中で意識的に取り上げている。また、第5時においては「地域紹介」の前段階の活動として「家族紹介」を組み込んでいる。「家族」であれ、「地域」であれ、「紹介」という点では共通の視点や言語機能の理解が必要である。いきなり「地域」紹介という活動に入るのではなく、身近な「家族紹介」というステップを踏ませていることも効果的である。前述したように松本は「英語が使えるということは、別の文脈でも習った表現を使うことができることである」²³と述べているが、この実践においては、まさに教科書で使う語彙や表現を「家族紹介」という別の文脈で使い、最終的にはさらに「地域紹介」という別の文脈で使うことが意図されている実践と言える。

また、筆者の参観した二つの授業は、ほぼ全て英語で授業が進められていた。英語が教科書の内容を問う質問や、授業を進めるための指示などに止まることなく、classroom discourse（機能的な目的をもつ英語）として使われていた。授業自体が実際に英語を使う場となっていたのである。このことも「実生活に活かす力をはぐくむ授業」の観点からは高く評価できる点である。

本実践は、これまで述べてきたように「活用法」の授業として優れている点が多い。しかし、研究総論で述べているように「活用法」の授業で求めているもう1つの重要な点は、活用法の授業を通して「思考・判断・表現」の能力をはぐくむことである。この点は従来の英語教育ではあまり意識されなかったということを前述したが、本実践でも「思考・判断・表現」の能力をはぐくむための教師の手立てが感じられない。この点は今後の課題としたい。

²³ 松本 in 安彦 (2008) p.81

まとめと今後の課題

平成24年度から全面実施される学習指導要領では、平成15年に示された「生きる力」の理念を引き継ぎ、改正教育基本法で示された学力の3つの要素（①基礎的な知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度）をはぐくむことが重要であることが示されている。当然のことではあるが、今後は「生きる力」と学力の3つの要素を抜きにして教育活動を考えることは許されない。琉球大学教育学部附属中学校では「実生活に活かす力をはぐくむ授業の創造」をテーマに掲げ実践に取り組んでいるが、研究内容としては「生きる力」と「学力の3つの要素」がそのまま入っている。そして「生きる力」と「学力の3つの要素」をはぐくむために、「実生活」という場を授業に取り込むことが効果的であると考えている。

本論文では、研究総論（全体研究）との整合性を大切にしながら各論（英語科）での考え方を示したものである。英語科においては従来から活用法の観点から授業を行っているが、思考力・判断力・表現力との関連においてはまだまだ研究・実践が進んでいない。本論文において、英語科におけるコミュニケーション能力と「活用法」の関係を整理しながら、思考力・判断力・表現力との関連について、実践例をもとに検討した。

今後はテーマに掲げた力が付いたかどうかを評価しなければならない。知識・技能のように目に見える力は評価しやすいが、「思考力・判断力」などのように、目に見えない力をどのように評価するかが今後の課題である。その点については今後さらに研究・実践を続けていきたい。

付記：本論文は琉球大学教育学部附属中学校英語科に受け入れられた考えではなく、あくまでも筆者の私論であることを付け加えておく。

【引用文献】

- Rivers, W.M. and M.S. Temperley (1978), *A Practical Guide to the Teaching of English as a Second or Foreign Language*, Oxford University Press
- 浅沼茂編集 (2008) 『新しい「基礎・基本」の習得』教育開発研究所
- 安彦忠彦編 (2008) 『活用力を育てる授業の考え方と実践』図書文化
- 大城賢 (1998) 「コミュニケーション能力を養成する授業と評価の工夫」沖縄国際大学外国語研究第2巻第2号
- 木原俊行 (2001) 『活用型学力を育てる授業づくり』ミネルヴァ書房
- 新里眞男ほか (2008) 『新学習指導要領ハンドブック』時事通信社
- 琉球大学教育学部附属中学校 (2011) 「第24回教育研究発表会学習指導案集」
- 琉球大学教育学部附属中学校 (2011) 「実践事例集第6集」